

(曾於郡大崎町横瀬エサイ)

位置と環境

横瀬古墳は町の中心部から東南方向約4kmの位置にある。志布志湾から西へ2.5kmの砂丘の内側にある標高6mの水田地帯に立地する県内で2番目に大きい前方後円墳である。水田地帯にあるため前方後円墳らしい優美な墳丘を現在に残していることでも注目される。

調査の経緯

この古墳は古くより知られており、研究も進められ、東串良町の唐仁古墳群・高山町の塚崎古墳群と共に国の史跡指定を受けており、全国からも注目されているものである。

江戸時代の文献にも記載されていたが、古墳であることを初めて紹介したのは瀬之口伝九郎である。その後、山崎五十麿・木村幹夫・救仁郷断二ら多くの研究者によって研究・考察が加えられている。昭和52年・53年には県教育委員会によって周辺の確認調査が行なわれ、濠の形態・規模があきらかになった。さらに、昭和63年には鹿児島大学や琉球大学を



第1図 横瀬古墳の位置

中心とした有志により墳丘の測量調査が実施され、それまで不確定だった墳丘の規模・形態が明白となった。

墳丘の規模・形状 (第2図)

墳丘は前方部が南西方向を向いており、主軸はN32度Eである。周濠を含めた総長160m、墳長132m、前方部長68m、前方部幅72m、後円部径64m、くびれ部幅48mである。濠は幅12~23m、深さ1.5m。高さは現地表面から前方部が11.5m、後円部が10.5mであるが、地表面が傾斜しているため後円部の方が1mほど高い。また、後円部は竪穴式石室が露出



第2図 横瀬古墳

するまで削平されているためもっと高かったものと思われる。濠はトレンチ調査で確認されているだけであるが、空中写真でも確認され、墳丘に添ったものであるが、くびれ部の部分が広がっていることから楕形にも近い。

埋葬主体は後円部に板石が露出している部分があり、ここが竪穴式石室の位置である。以前盗掘されたということであるが、鉄器などが持ち出されたと言われている。

遺物（第3図・4図）

遺物は、石室から鉄器が持ち出されたということであるが詳細は不明である。

墳丘では昔から円筒埴輪（第4図1～7）・形象埴輪（第3図）が採集されており、埴輪を有する最南端の古墳としても知られているが、県教育委員会の周濠の確認調査の際にも多量の円筒埴輪片が出土している。また、志布志高校にはほぼ完形の埴輪が採集されている。鹿児島県歴史資料センター黎明館には、故寺師見國のコレクションがまとまって保管され、形象埴輪が数多く見られる。形象埴輪には、人物（武人）の手（第3図1～3）、腕（第3図4～6）、装飾馬の飾り鈴（第3図7・8）、馬の足（第3図9）、水鳥（第3図10）、楯（第3図11～13）、

草摺（第3図14・15）不明なもの（第3図16・17）等種類も豊富である。

注目される遺物として須恵器があげられる。須恵器は周濠から出土したものであるが、器台（第4図8～13）と壺がある。これらの須恵器には、伽耶系陶質土器と陶邑産須恵器とがあるといわれている。

横瀬古墳は、墳丘の形状・主体部（竪穴式石室）・出土遺物（埴輪や須恵器）の特徴から五世紀中頃～後半のものと考えられるものである。

資料の所在

採集遺物・出土遺物は、鹿児島県歴史資料センター黎明館および鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

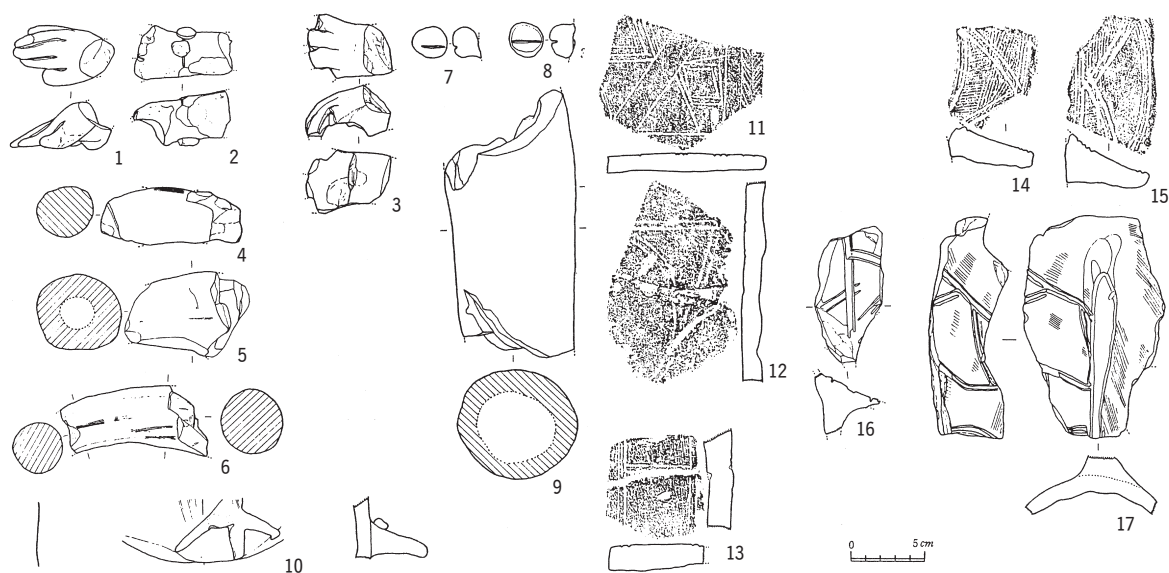
参考文献

瀬ノ口傳九郎1919「大隅國大崎村瓢箪形古墳及びその埴輪について」『考古学雑誌』9—9

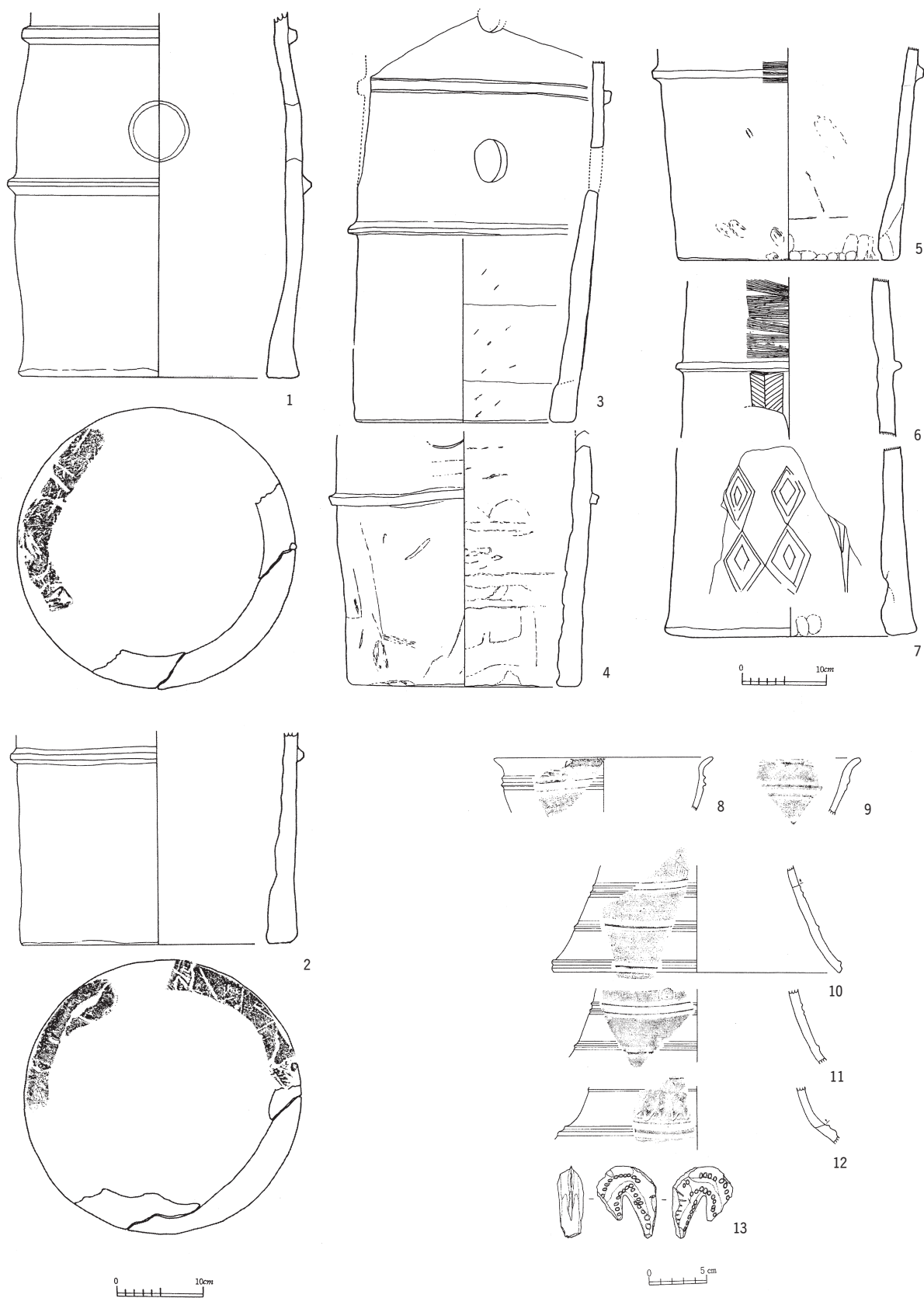
瀬ノ口傳九郎1923「大隅における古墳の分布および其概観」『考古学雑誌』14—3年

鹿児島県教育委員会1984「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』29

（中村耕治）



第3図 出土遺物（形象埴輪）



第4図 出土遺物（円筒埴輪・須恵器）